

わたしは、カウンターのある料理屋さんが好きだ。

カウンターのこちら側から、厨房に立つ料理人の動きを見るのも楽しいし、料理ができあがっていく様子を見るのも楽しい。

「この匂いは、わたしの頼んだ唐揚げかしら」

「たまごを混ぜる音がするのは、だし巻玉子にちがいないな」

「このかぐわしいガーリックのかおりは、いったい何をつくっているの!？」

目の前にある料理を食べつつ、お酒をいただきながらも、厨房の中が気になってしまう食いしん坊の性。そして、次はあれを頼もう、そう心に決める。

2019年3月7日から10日まで、富山オーバード・ホールで上演された「ダークマスター 2019 TOYAMA」は、富山のさびれた商店街にある定食屋が舞台。

開演時間を少し過ぎ、すうっと幕が開くと、わたしは6人掛けのカウンターがある定食屋の店内にいた。なんとなく点いているのであろうテレビからは、地元のニュースが流れている。アナウンサーは、この土地に起きていることを詳らかに、そして感情もないままに読み上げる。

店のカウンターには、だらりと座るひとりの男。伸びきった髪を無造作に束ね、灰色のスウェット、足元はサンダル。男は酔いがまわっているのか、重い足取りで徘徊するように次の酒を探し、再びカウンターの椅子に座る。六渡達郎演じる、定食屋のマスターである。

テレビは相変わらず、抑揚なく、情報を流している。

いくらかの時間が経ち、ゆっくりと開く定食屋の引き戸。店内の様子を伺いながら、若い男が入ってくる。善雄善雄演じる若者は、マスターから歓迎されていないのが明らかであるにも関わらず、店内がレトロで良いだの、水を飲ませてくれただの、腹が減っただの、東京から来ただの、自分探しをしているだの、スマホは置いてきただのと言いながら、店内に少しずつ入り込んでくる。

初めこそ、関わることを拒絶しているようにも見えたマスターも、目の前に突然現れた、よくしゃべる客に観念したのか、食事を作ってくれるという。

厨房に立つマスターは、先ほどまでのどんよとした雰囲気が消え、無駄のない動きで料理を仕上げていく。何度もカウンターを覗き込みながら、少しずつマスターに近づく若者。厨房からふんわりと届く溶けたバターの香りで、若者がそうであるように、わたしの気分も高まる。

若者が注文した「名物立山ライス」は、こんもりと盛られたトマトケチャップ色のチキンライスの上に、とろりとやわらかいたまご、さらにたっぷりとホワイトソースがかかる一皿。この立山ライスをはじめ、劇中に登場する料理は、どれもこれも「あれは絶対に美味しい」と断言できるほどの魅力を放っていた。

中でも、「サーロインステーキ」は、指2本分もの厚みのある肉を使う。分厚い肉が、

油たっぷりのフライパンで焼かれていく音、あとからやってくる肉の焼けた匂い。ナイフを入れると、外はこんがり香ばしく、中はほのかにレアという抜群の焼き加減。その見た目と、音と匂いによって、わたしの頭の中はステーキに支配される。

そして「ナポリタン」の調理シーンでは、舞台上部のスクリーンいっぱいにおなじみの玉ねぎやピーマンなどの具材たちが炒められていく様子が映し出される。少しずつ火が通っていくその映像と漂うバターの香りは、わたしの舌が覚えているナポリタンの記憶をはっきりと呼び起こす。ああ、今すぐにでも、あのナポリタンを食べたい。

立山ライスを堪能した若者は、マスターから頼まれるがままに、むしろ半ば強引に定食屋の厨房に立ち料理をすることになる。マスターは、自作の超小型イヤホンで若者の耳に取り付け、料理の手順は自分が指示を出す、イヤホンから聞こえる通りに作れ、という。定食屋の2階にあるという自室に向かう途中、振り向きざまに若者に向けて投げキッスをするマスターのなんとチャーミングなこと。あんな風に笑う人なのだ、と驚いた。

そして、私たちがマスターの姿を見たのは、これが最後だった。

次の日、ランチタイム。

厨房に立ち料理をする若者と、自室から料理の作り方を伝えていくマスター。

若者にとって、「定食屋のマスター」という仕事は、キャパシティオーバーであることは明らか。イヤホンから聞こえるマスターに返事をしてしまったり、マスターのことばを復唱してしまったり、さらにフライパンを持ったまま厨房を出たりと、予想以上の行動を取り続け、コミカルさを炸裂させる若者と、それに呆れかえるマスターの対比が笑いを誘う。わちゃわちゃしている若者を見る私たちが抱く思いを、的確なツッコミとしてぶつけていくマスターに、場内の笑いも絶えない。

そんな様子を見て心配になるマスターをよそに、自分が作った料理を美味しいと言ってもらえたことがたまらなく嬉しかった若者の大はしゃぎして喜ぶ姿が、とてもかわいらしい。

13 日目、ディナータイム。

若者は、料理も接客も自然な動作でこなせるようになっていた。

閉店時間を過ぎてから、飛び込むように入ってきた小太りの男。つるりとした頭で、優しい口調。しかし、招かれざる客なのではないかと、すぐにそう思えるほど、何かいやな感じをまとう。スクリーンに映し出された男の歪んだ表情、毛穴の開いた肌、じっとりとこちらを見ている目。いやな感じが幾重にも重なり、不快感で鼓動が速くなるのを感じる。男は再訪すると言いつつ、店を去った。

その直後、再び定食屋の戸をリズムカルに叩く影が現れる。戸が開いた途端に、富山弁全開で勢いよくやってくる新たな訪問客。見たところ40代の女性、迫力のある胸元を強

調した丈の短いワンピース、肩には大きなカバン、夜の香り。どうやらマスターが若者のために招いた客らしい。女性の手には、消毒液。

そう、この日、若者は生まれ変わったのである。

33 日目、ディナータイム。

定食屋は、客足の絶えない人気店になっていた。

厨房に立つ若者は、まるでアイドルグループのメンバーのようなスタイリッシュさで、白いコック服がそれを引き立て、すっかり「マスター」の顔。しかし、そこに表情はない。料理が褒められたと、声がうわずるほど喜んでいて彼からは想像もできないほど。厨房の中、ひとり、たばこを燻らせ、酒を飲み、客たちが賑やかに話しているのを冷やかな目で見やる。それでも、常連客へのおべんちゃらと、女性客への軽いスキンシップ、耳元で囁く甘いことばも忘れない。

閉店後、あの招かれざる客が再び現れる。定食屋の立退料である大金を携えて。若者がわざとらしいほどに丁寧な断ると、幼稚な嫌がらせが続く。お気に入りのお店が汚されているようで、胃がチリチリと痛む。

若者は、定食屋のマスターを引き受けたすぐの頃に「ゲームみたいで楽しい」と言っていた。しかし、自分の作る料理を美味しいと食べてくれる客がたくさんいて、商店街に人が戻ってきたとその土地の人たちに感謝をされる。そうして行く中で、彼の中に大きな変化が起きていたのだろう。

東京からはるばる自分に会いに来てくれた彼女に向かって、こう言い放つ。

「求められて、認められたことあるか？」

自分の居場所はここであり、この土地を守らなければならないのだと。そう思っている彼にとって、大事な場所である「定食屋」を壊そうとする、あの小太りの男は、絶対に許してはならない存在になっていた。彼は、自らの意志で、直接的な行動に出る。

暗くなった場内に響く「ドナドナ」は、マスターに、そしてこの定食屋に絡めとられた若者のための歌なのだろう。そして定食屋は、次の「マスター」を探している。

わたしも、ふらりと入った居酒屋のマスターに「俺の代わりに料理作ってよ」なんて言われるかもしれないな。そんなことを思い、ふふふと笑いながら、カウンターのある居酒屋ののれんをくぐった。

M.T (石川県金沢市)